－所蔵作品紹介－

小清水　漸　KOSHIMIZU Susumu

表面から表面へ

作品データはこちら

壁面に立て掛けられた15枚の板にはそれぞれ直線的な彫りや切り込みが施されている。それぞれの幾何学的な模様が織りなすかたちは、「表面から表面へ」というタイトルが示唆しているようにそれぞれ互いにリズミカルに呼応し、関連しあってひとつの組織体が形成されているようにみえないだろうか。また、遠くからみるとある種の巨大な木工細工を思わせ、その壮大なスケールには圧倒される。

小清水漸は1944（昭和19）年、愛媛県宇和島市に生まれる。多摩美術大学彫刻科に学び、また斎藤義重から大きな影響を受けた。1970年前後、小清水をはじめ李禹煥、菅木志雄ら一群の作家たちが台頭した。「もの派」といわれた彼らの作品は、木、石、ガラス、鉄などをほとんど未加工のまま組み合わせたり放置したりするなどして、場の状況へ働きかけ、ものの存在によって空間世界の認識を促すものであった。「もの派」の作家たちは、ほぼ時期を同じにする欧米のコンセプチュアル・アートの影響を受けているといえる。だが一方で、彼らの作品には東洋的思考をみて取ることができるとともに、これまで無批判に受け入れてきた欧米のモダニズムに対しアンチテーゼを示すものであった。また産業技術社会への反動でもあったといえる。「もの派」はグループ的集団としては確固たるものではなく、またその名称の由来さえ不明である。彼らの「もの派」としての活動期間は短く、以降彼らはそれぞれ独自の制作活動を展開していった。

20歳代半ばに作家活動を開始した小清水は、紙と石を用いて物質の存在感を探求した作品に取り組み、「もの派」の主要な作家のひとりとされた。しかし彼はいち早く、すなわち1970年には「もの派」から離れていった。そして物質の存在とそれに働きかける自分のリアリティーを求めることを試み、1971（昭和46）年からは「表面から表面へ」シリーズに着手していった。この作品は同年に発表された「表面から表面へ」（14点組、現存せず）に基づき1993（平成５）年再制作されたものである。木材に電気ノコギリで厳密に繰り返しのパターンを刻み込んでいくといった作業が加えられることによって木材の形は変わり、その新たな存在感が立ち現れる。同時に、木に行為を加えた作家のリアリティーが示されることになるのである。

旭川美術館だより「氷華」No.46（2005.３発行）「収蔵作品から」より